

デス・エデュケーションに役立つ映画の検討

西山 美聡* ・ 石田 弓**

A Study of Films Useful for Death Education

Misato Nishiyama* Yumi Ishida**

The subject of death education has been in focus this year. Even though films can prove to be an effective teaching material for death education, few films can be used for this purpose, and no study yet proves the effectiveness of films. This study examines the usefulness of two films, “My Life without Me” and “The Bucket List,” as teaching material for death education. The writer has set three goals that should be achieved from watching the film: (1) recognition of the finiteness of one’s own life and the preciousness of time, (2) reflection on one’s life in the past and future, and (3) recognition of the preciousness of one’s own life and gratefulness for being alive. Results of the study prove that both movies have valid viewpoints to achieve all three goals, and they were recognized as useful teaching material for death education. Even though the two movies have a common theme of “death” the aspects of the views on “death” and “life” that viewers ascribe to each film vary from what the film depicts.

Keyword : death education, films

問題と目的

現在、病院死の一般化、死について公に語ることへのタブー視などにより、人々が実際に死に直面する機会は減少している。しかし、デーケン（1986）は「自分の死」を考えるには、「自分の生命」を考えなければならないと述べており、Kübler-Ross（1974 鈴木昌訳 2001）もまた、死を意識することによって、人は最後の段階まで成長すると述べている。このように、死について考えることに有意義な側面があることが指摘されている。これを受けて、今日、教育現場においてデス・エデュケーションが入れられてきている。

デーケン（1986）によると、デス・エデュケーションとは、「死を身近な問題として考え、生と死の意義を探究し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを習得すること」を目的とするものである。デーケン（1986）は以下の「デス・エデュケーションの15の目標」を掲げている。

*広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education ,Hiroshima University）

**広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター（Training and Research Center for Clinical Psychology ,Graduate School of Education ,Hiroshima University）

- ① 死へのプロセスならびに死にゆく患者の抱える多様な問題とニーズについての理解を促すこと。
- ② 生涯を通じて自分自身の死を準備し、自分だけの死を全うできるように、死についてのより深い思索を促すこと。
- ③ 悲嘆教育（グリーフ・エデュケーション）。
- ④ 極端な死への恐怖を和らげ、無用の心理的負担を取り除くこと。
- ⑤ 死にまつわるタブーを取り除くこと。
- ⑥ 自殺を考えている人の心理について理解を深めること、また、いかにして自殺を予防するかを教えること。
- ⑦ 告知と末期癌患者の知る権利についての認識を徹底させること。
- ⑧ 死と死へのプロセスをめぐる倫理的な問題への認識を促すこと。
- ⑨ 医学と法律についての理解を深めること。
- ⑩ 葬儀の役割について理解を深め、自身の葬儀の方法を選択して準備するための助けとすること。
- ⑪ 時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激し、価値観の見直しと再評価を促すこと。
- ⑫ 死の芸術（アルス・モリエンディ）を積極的に習得させ、第三の人生を豊かなものとする事。
- ⑬ 個人的な死の哲学の探求。
- ⑭ 宗教における死のさまざまな解釈を探ること。
- ⑮ 死後の生命の可能性について積極的に考察するよう促すこと。

元来、デス・エデュケーションは看護学生を対象とすることが主であったが、近年は小学校から高校までの学校現場にも取り入れられてきている。一方、看護以外を専攻する大学生に対して実施される例は未だに少数である。しかし、デーケン（1986）、Kübler-Ross（1974 鈴木昌訳 2001）が述べるように、デス・エデュケーションはより良く生きるための教育でもあり、看護以外を専攻する大学生にも有効に働くと考えられる。そこで本研究では、看護専攻以外の大学生を対象としたデス・エデュケーションについて検討する。

デス・エデュケーションの教材には様々なものがあり、視聴覚教材も多く使用されている。藤腹（1986）はデス・エデュケーションに適した視聴覚教材としてドキュメント VTR と映画を挙げているが、現在教材として用いられているもののほとんどがドキュメント VTR である。エンターテインメント目的に制作された映画に対し、本来デス・エデュケーションを目的としているドキュメントの方が、教材として扱いやすいということが大きな理由と考えられる。しかし、映画は個人のプライバシーに抵触することなく、事例の全体性を尊重（林・上野，2009）することができる。林・上野（2009）は医療・臨床心理学教育における映画教材の有効性について検証しており、映画は、フィクションながらも映画中で起こることを身近なものと感じさせ、さらに興味をもたせるという点で、教育効果をもつということを明らかにしている。デス・エデュケーションに映画を用いている先行研究としては、秋山・加藤（2003）の研究が挙げられる。秋山・加藤（2003）は、デス・エデュケ

ーションを目的とした大学の共通教育の講義の中で映画を教材として多用し、「自分の生や死について考えられるようになった」、「自分の生き方が変わった」、「目標を持った生き方ができるようになった」という学生の感想を多数得た。しかし、これは全 14 回にわたる講義に対しての評価であった。講義には教材として他のものも含まれ、映画に限定しての教育効果を示しているものではない。映画の教育効果を実証的に検討しているものは、デス・エデュケーションの分野においてはほとんどないのが現状である。そこで本研究では、筆者が選択した映画が、大学生を対象としたデス・エデュケーションの教材として適したものであるかどうかを検討する。

デス・エデュケーションの教材としての映画の有用性を検討する際の、具体的な目標を設定する。佐伯・高内（2008）によると、青年期は自己のアイデンティティを形成し、自己を評価し、将来の方向性を決めていく時期であり、人生観の確立が重要な発達課題の 1 つとなる。そこで本研究でも、この発達課題の達成につながるものをデス・エデュケーションの目標として設定する。佐伯・高内（2008）が掲げる青年期の発達課題の達成に有効なものとして、先述のデーケン（1986）の 15 の目標から「⑩時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激し、価値観の見直しと再評価を促すこと」が挙げられる。本研究では、デーケン（1986）の目標⑩を参考に、次の 2 つの目標を設定した。

「自己の命の有限性、時間の貴重さを認識すること」を目標 1 とする。デーケン（1986）によると、多くの人は、あたかも時間がまだいくらでも自由に使えるかのように、日々をただ漫然と過ぎ去るにまかせており、それゆえ充実した生をおくることなく、散漫に生き、貴重な時間を無為に費やしている。しかし、自分の時間が限られていると悟ることにより、私たちは時間の尊さを発見し、それによって残された時間をより有意義に過ごすことができるようになる。時間をいくらでもあるように感じるこの傾向は、死期がまだ差し迫っていない青年には特に当てはまると考えられる。

「これまでの生き方に対する反省と、今後の生き方についての思索がなされること」を目標 2 とする。人生を有意義なものにしようとする場合、それまでの生き方への問い直しの作業が不可欠である。デーケン（1986）は、死によって物質的財産を失うことを熟視することで物質的な財産の価値の相対性に気づき、愛、友情、人格の高潔など、死によっても奪われることのない永続的な価値の重要性を見出すことを、目標 ⑩の具体的な内容としている。つまり、デーケン（1986）は目標⑩として物質的な財産と形のない財産に関する価値観への問い直しを定めている。しかし、本研究の対象は大学生である。大学生は、自己のアイデンティティを形成し、自己を評価し、将来の方向性を決めていく時期にあり、人生観の確立が重要な発達課題（佐伯・高内，2008）であることから、本研究ではデーケン（1986）の「価値観」に留まらず、人生の目標や意義も含む「人生観」に焦点を当てることとする。

また、目標 3 として、デーケン（1986）の目標を参考としたものとは別に、学校現場でのデス・エデュケーションにおいて、テーマとして頻繁に用いられるものを設定する。「自己の命の大切さ、今生きていることのありがたさを認識すること」として設定する。デス・エデュケーションとは「生」と「死」を通して命とは何かを考える教育だと定義できる（大津，2005）。特に高等学校以下の教育現場においては、命の大切さを教えるためのものとしてデス・エデュケーションが取り入れられることが多い（海老根，2008）。命の大切さを認識することは、自分の人生に真剣に取り組む上で重要

だと言える。

そして、以上の3つの目標は次のような流れで達成されるのではないかと考えた。自己の命の有限性を認識すること（目標1）により、自己の命の大切さにも認識が及び（目標3）、さらにこれらを踏まえて自分の生き方に関する思索がなされる（目標2）。自分の命には限りがあり、いつかはなくなってしまうということに気付くということで、次にその限られた命の大切さを認識することに繋がる。そして、それらの気付きを踏まえて、生き方への振り返りが為されるのではないだろうか。

本研究では、次の2本の映画が、筆者が設定したデス・エデュケーションの3つの目標を達成するための教材として有効であるかどうかを検討する。筆者から見て、3つの目標全てについて達成に有効な視点を持つと考えられる映画を選定した。また、いずれの映画でも主人公がいきなり死の宣告を受け、残りの人生をどう生きたいかを考えるという類似した流れをもつものとした。これは、流れの類似したものを扱うことにより、映画間での他の相違点の影響を確認しやすくなると考えたためである。

次に映画のたまかなあらすじを紹介する。1つ目の映画は『死ぬまでにしたい10のこと (My Life Without Me)』（2003、カナダ、出演：サラ・ポリー、スコット・スピードマン、監督：イザベル・コイシエ）である。2人の幼い娘と、失業中の夫と暮らすアンが、23歳で余命2ヶ月を宣告される。その事実を誰にも告げないことを決めたアンは、「死ぬまでにしたい10のこと」をノートに書き出し、1つずつ実行してゆくというストーリーである。この映画では一般的に死と遠いと考えられる若者が死に直面することから、死がいつ訪れるかわからないことを示している。本研究の参加者はこの主人公と同年代であることから、参加者自身にとっても死は無関係なものではないことを気づかせることが期待できる。

もう1つの映画は『最高の人生の見つけ方 (The Bucket List)』（2007、アメリカ、出演：ジャック・ニコルソン、モーガン・フリーマン、監督：コブ・ライナー）である。全く違う生き方をしてきた2人の老人カーターとエドワードは、病院で相部屋となり、共に余命半年の末期ガンであることが判明する。死ぬ前にやっておきたいことをメモしたカーターの「棺おけリスト」を見つけたエドワードは、リストの実行を持ちかけ、2人は旅に出る。人とのつながりに対する喜びが描かれた映画である。この映画は、2人の主人公がそれぞれの日常生活を送る中で急に病気が発覚するところから始まる。当たり前の日常から急に死に直面させられるところから、死はいつ突然やってくるかわからないことが示されている。しかし、この映画の主人公はどちらも高齢者であり、死への直面の意外性が低い。また、参加者と年齢が離れていることもあり、『死ぬまでにしたい10のこと』と比較すると、「突然の死」のインパクトは弱いことが予想される。この映画の大きなテーマとして「人とのつながりの温かさ」が挙げられ、自分と周囲との関係性を見つめなおすのに有効と考えられる。

事前調査

目的

設定した3つの目標に関することがらについて、大学生が普段からどの程度考えているかという

ことについて調べる。また、大学生一般から得られた傾向と、本調査への参加者の傾向とを比較することにより、本調査結果の一般化可能性について検討することとする。

方法

調査参加者 大学生 181 名。

調査内容 筆者の設定した 3 つの目標に関することについて、普段から考えることがどの程度あるかを調べる質問 3 項目。4 件法（「よくある」～「ほとんどない」）。質問 1. 普段の生活の中で、自分の命の有限性や、時間の大切さについて考えることがありますか？質問 2. 普段の生活の中で、今生きていることのありがたさや、命の大切さについて考えることがありますか？質問 3. 普段の生活の中で、自分の人生において重要な価値観や生き方について考えることがありますか？

手続き 大学の講義時間に研究の概要を説明した後、所要時間 5 分程度で実施し、165 名分の回答を得た。16 名には筆者が個人的に協力を依頼した。また、この際に本調査の参加者も募った。

結果

筆者の設定した 3 つの目標に関する、大学生の普段からの思索程度について、事前調査へ回答を得られた全ての参加者の平均（全平均）と、本調査にも協力を得られた参加者の平均（本調査参加者平均）を目標ごとに算出した。算出された得点の平均は以下の通りであった。最高得点 4.00 点のところ、質問 1 では全平均 2.63 点、本調査参加者平均 2.80 点。質問 2 では全平均 2.74 点、本調査参加者平均 2.33 点であった。質問 3 では全平均 2.74 点、本調査参加者平均 2.90 点であった。

考察

本研究の 3 つの目標に関することがらについての思索頻度を調べたところ、いずれの目標においても、平均値が「たまにある」～「ときどきある」の間に見られた。このことから、大学生が普段からある程度思索していることがうかがわれた。近年、死と直接的に遭遇する機会が減り、若者が「死」について考える機会が減っているとよく言われている。しかし、本研究の結果からは必ずしもそうではないと言える。また、丹下（1995）が直接的に他者の死を経験することのみが死生観を決定するというわけではなく、間接的な死の経験を通してであっても死生観は同様に形成されうると述べているように、「生」と「死」についての思索は、直接的に死に遭遇することだけでなく、他の間接的に死に接する経験からも促されていると考えられる。

また、事前調査への参加者の平均と、本調査への参加者の平均を比較するとおおよそ同程度の思索頻度であった。このことから、「死」や「生」というテーマに特に興味のある人が本調査に参加したわけではなく、本調査の参加者は一般的な大学生を代表していたものと考えられる。

本調査

目的

筆者が選出した 2 本の映画が、設定したデス・エデュケーションの 3 つの目標に適したものであるかどうかを検討する。そのために、大学生にこれらの映画を視聴させ、その後、3 つの目標の達成に有効な視点を調べるための課題、及びその視点からの具体的な思索内容を調べるための課題に

回答させることとする。また、それぞれの映画で描かれている内容が各目標の達成に異なる影響を及ぼすかどうかについても検討する。

方法

調査参加者 事前アンケートで回答を求めた大学生 181 名のうち、本調査への参加に同意を得られた 21 名を 2 本の映画にランダムにふりわけた。2 本の映画の参加者数は、それぞれ『死ぬまでにしたい 10 のこと』10 名、『最高の人生の見つけ方』11 名であった。

調査期間 2010 年 11 月下旬～12 月上旬の期間に 4 回に分けて実施した。

映画 『死ぬまでにしたい 10 のこと』、『最高の人生の見つけ方』

場所 大学の教育学部の講義室をした。

映画視聴用機材 『死ぬまでにしたい 10 のこと』、『最高の人生の見つけ方』の DVD、80 インチスクリーン、プロジェクタ、DVD プレーヤー、スピーカー。

手続き 最初にこの研究がデス・エデュケーションの教材としての映画を検討することを目的としていること、「死」を主題とする映画であるため、いつでも参加を拒否できることを教示した。次に、参加者に映画を 1 本全て視聴させ、その後課題に回答させた。

課題 映画のどのような視点が目標の達成に有効かということと、その視点からの具体的な思索内容を知るためのもの。課題 1 では「自分の命の有限性や時間の大切さ（目標 1）」について、課題 2 では「自分の命の大切さ、今生きていることのありがたさ（目標 3）」について、課題 3 では普段の生活や価値観、もしくはこれまでの人生を振り返らせ、これからの生き方について考えさせる（目標 2）ために、映画が有効であるかどうかを問うものとした。課題の内容を以下に示した。

質問 1) では各目標の達成に有効な視点を筆者が考え、提示した。i) ではその視点から参加者自身が各目標に関して考えさせられたかどうかを問い、ii) ではその視点の一般的な有効性（世間一般の多くの人に対しても有効かどうか）を評価させた（4 件法）。

質問 2) では質問 1) の視点以外に各目標について考えさせる視点もしくは内容を参加者に挙げさせ、その視点の一般的な有効性を評価させた（4 件法）。

質問 3) では質問 1)、質問 2) の視点から参加者が目標に関して実際に考えた内容を自由記述させた。

結果

結果の整理 質問 1) の i) では、筆者が提示した視点から、各目標について「考えさせられた」という参加者の人数を視点ごとに数えた。ii) では、各目標の達成についてのその視点の一般的な（世間一般に対する）有効性の、参加者全員の評価の平均を算出した。そして、これらの視点が、筆者が設定した 3 つの目標を達成するものとして妥当かどうかを、以下の基準から判断することとした。i) で人数が 7 割以上のものは、ii) の値に関わらず妥当な視点とし、その中でも ii) で 2.00 点を超えるものは、特に妥当性の高いものと評価した。i) の人数が 5 割以上、7 割未満のものも、ii) の評価平均が 1.00 点以上であれば妥当性を有する視点とみなした。i) で人数が 5 割未満のものは ii) の値に関わらず妥当な視点ではないと判断した。

質問 2) では、参加者が挙げた視点ごとに、その視点を挙げた参加者の人数、及びそれらの参加

者によるその視点の一般的な有効性の評価の平均を算出した。ここでは、筆者が提示した視点以外で3つの目標を達成するのに有効と考えられるものとして、類似した視点または内容が、全体の3分の1以上の参加者から挙げられた場合、その内容または視点が各目標の達成に妥当と判断した。また、3名の参加者によって挙げられた場合に限り、人数が3分の1に達していなくとも、一般性の評価の平均が2.00点以上の高得点であれば目標の達成に妥当な視点と判断した。質問3)では、筆者が提示した視点、及び参加者から挙げられた視点から、各目標に関して参加者が実際に思索した内容として、多数の参加者に類似した内容が見られた場合、映画がその内容について考えさせるのに有効なものと考えた。

『死ぬまでにしたい10のこと』 目標1「自己の命の有限性、時間の貴重さを認識すること」を達成する視点及びその視点からの具体的な思索内容は以下の通りであった。(a) 目標1の達成に有効なものとして筆者が提示した視点についての参加者の評価を、Table 1に示した。視点A「アンは23歳という若さにして、突然死を宣告されるという点」でi)が8名、ii)が評価平均1.90点であった。(b) 目標1の達成に有効なものとして、参加者が挙げた視点をTable 2に示した。「アンが死の宣告を受けた後、死ぬまでにやりたいことを挙げて、書き出していた点」が4名の参加者から挙げられ、一般的な有効性の評価平均2.50点であった。(c) 以上の視点からの目標1についての具体的な思索内容としては、命が有限であること、死がいつ訪れるかわからないということへの気付きや言及が7名に見られた。人生をどう生きたいか、どう生きるべきかについて考える記述が4名に見られた。「自分の気持ちを周囲の人に伝えたい」という記述が2名に見られた。また、アンの境遇を「もしも自分だったら」と考えている記述が5名に見られた。

Table 1 『死ぬまでにしたい10のこと』

課題1 質問1 筆者が提示した視点に対する参加者の評価 (n=10)

	i) 人数	ii) 評価平均
A アンは23歳という若さにして、突然死を宣告されるという点。	8	1.90

Table 2 『死ぬまでにしたい10のこと』

課題1 質問2) 参加者から挙げられた視点

	人数	評価平均
アンが死の宣告を受けた後、死ぬまでにやりたいことを挙げて、書き出していた点	4	2.50

目標2「これまでの生き方に対する反省と、今後の生き方についての思索がなされること」を達成する視点及びその視点からの具体的な思索内容は以下の通りであった。(a) 目標2の達成に有効なものとして筆者が提示した視点についての、参加者の評価をTable 3に示した。視点A「アンは、死の宣告を受けた後、世間に『くだらないもの』が溢れていることに気付き、また、もっと大切なものに目を向けるようになったという点」はi)が5名、ii)が1.60、視点B「アンが、死の宣告

を受けた後に、残りの人生で何をするか考えた点。また、その時点で出来ることには限りがあったという点」は i) が 7 名, ii) が 1.60 であった。(b) 目標 2 の達成に有効なものとして、3 分の 1 以上の参加者から挙げられた視点はなかった。(c) 以上の視点からの目標 2 についての具体的な思索内容としては、自分がこの先どう生きるべきかについての記述が 4 名に見られた。「世間には無駄なものが多く、本当に大切なものに気がしにくくなっている」といった、価値観に関する記述が 3 名に見られた。「もっと色々なものを見て、感じて生きていきたい」という記述が 2 名に見られた。

Table 3 『死ぬまでにしたい 10 のこと』

課題 3 質問 1) 筆者が提示した視点に対する参加者の評価 (n=10)

		i) 人数	ii) 評価平均
A	アンは、死の宣告を受けた後、世間に「くだらないもの」が溢れていることに気づき、また、もっと大切なものに目を向けるようになったという点。	5	1.60
B	アンが、死の宣告を受けた後に、残りの人生で何をするか考えた点。また、その時点で出来ることには限りがあったという点。	7	1.60

目標 3 「自己の命の大切さ、今生きていることのありがたさを認識すること」を達成する視点及びその視点からの具体的な思索内容は以下の通りであった。(a) 目標 3 の達成に有効なものとして筆者が提示した視点に対する参加者の評価を Table 4 に示した。視点 A 「アンが『この先も家族と共に生きていきたい』という気持ちを抱いている点」は i) が 5 名, ii) が 2.00, 視点 B 「マーケットでアン以外の人が全員踊っているシーンがある。多くの人が死を考えずに生活しているが、アンにとって、生きる時間がまだたくさんあることは、踊るほど幸せなことだという点」は i) が 2 名, ii) が 0.80, 視点 C 「アンは人生でやり残したことを実行していく。何かをしたり、気持ちを伝えたり、色々な感情を感じたりできるのは、生きているからこそだという点」は i) が 8 名, ii) が 2.10, 視点 D 「アンは、自分が死んだ後、子どもたちが自分を忘れてしまおうと語っている。しかし、アンの両親がどんな人物であってもアンにとって掛け替えのない存在であるように、子供たちやダンにとってもまた、アンの代わりとなる存在などいないという点」は i) が 5 名, ii) が 2.10 であった。(b) 目標 3 の達成に有効なものとして、3 分の 1 以上の参加者から挙げられた視点はなかった。(c) 以上の視点からの目標 3 についての具体的な思索内容としては「全ての経験、思い、人との繋がり、生きているからこそ存在するものなのだ」ということへの気づき・言及が 4 名の記述に見られた。また、「自分は人と繋がっており、自分の命は自分だけのもので終わらない大切なもの」といった記述が 2 名に見られた。

Table 4 『死ぬまでにしたい10のこと』

課題2 質問1) 筆者が提示した視点に対する参加者の評価 (n=10)

	i) 人数	ii) 評価平均
A アンが「この先も家族と共に生きていきたい」という気持ちを抱いている点 マーケットでアン以外の人が全員踊っているシーンがある。多くの人が死を考えず	5	2.00
B に生活しているが、アンからすると、生きる時間がまだたくさんあるということは、 踊るほど幸せなことだという点	2	0.80
C アンは人生でやり残したことを実行していく。何かをしたり、気持ちを伝えたり、 色々な感情を感じたりできるのは、生きているからこそだという点	8	2.10
D アンは、自分が死んだ後、子どもたちが自分を忘れてしまっただろうと語っている。 しかし、アンの両親がどんな人物であってもアンにとって掛け替えのない存在であ るように、子供たちやダンにとってもまた、アンの代わりとなる存在などないとい う点	5	2.10

『最高の人生の見つけ方』 目標1「自己の命の有限性、時間の貴重さを認識すること」を達成する視点及びその視点からの具体的な思索内容は以下の通りであった。(a) 目標1の達成に有効なものとして筆者が提示した視点についての参加者の評価をTable 5に示した。視点A「カーターとエドワードは、健康に暮らしていたが、急に余命を宣告されることになる。死はいつ訪れるかわからないという点」はi)が9名、ii)が1.90点であった。(b) 目標1の達成に有効なものとして、参加者が挙げた視点をTable 6に示した。「余命の宣告後に主人公達が残りの人生をどう生きたいか考えた点」が4名の参加者から挙げられ、評価平均2.75点であった。また、「余命の宣告後に主人公達が改めて自分の人生を振り返り、生き方を変えた点」が3名から挙げられ、評価平均2.00点であった。(c) 以上の視点からの目標1についての具体的な思索内容としては、命が有限であること、死がいつ訪れるかわからないということへの気付き・言及が4名に見られた。また、「時間をもっと大切に使おうと思った」、「限られた“今”を大切にすることが大切だと感じた」などの、限りある人生をどう生きるべきか、どう生きたいかについて考えているものが4名の記述に見られた。自分なら死ぬまでに何をしたいかについて考えさせられたという記述が2名に見られた。「人生が有限だから時間が大切」ということに対して異を唱える記述が2名に見られた。

Table 5 『最高の人生の見つけ方』

課題1 質問1) 筆者が提示した視点に対する参加者の評価 (n=11)

	i) 人数	ii) 評価平均
A カーターとエドワードは、健康に暮らしていたが、急に余命を宣告され ることになる。死はいつ訪れるかわからないという点。	9	1.90

Table 6 『最高の人生の見つけ方』
課題 1 質問 2) 参加者から挙げられた視点

	人数	評価平均
余命の宣告後に主人公達が残りの人生をどう生きたいか考えた点	4	2.75
余命の宣告後に主人公達が改めて自分の人生を振り返り、生き方を変えた点	3	2.00

目標 2「これまでの生き方に対する反省と、今後の生き方についての思索がなされること」を達成する視点及びその視点からの具体的な思索内容は以下の通りであった。(a) 目標 2 の達成に有効なものとして筆者が提示した視点に対する参加者の評価を Table 7 に示した。視点 A「『他人の人生に喜びをもたらす』、『見ず知らずの人に親切にする』、家族との関係など、人とのつながりが描かれている点」は i) が 10 名、ii) が 2.72 点であった。視点 B「余命を宣告された後、2 人は旅に出るが、刹那的な楽しみに疑問を感じ、最終的にそれぞれの家族のもとへ戻っていくという点」は i) が 7 名、ii) が 1.54 点であった。視点 C「家族のために生きてきたカーターと、キャリア中心に生きてきたエドワードが対照的に描かれている点」は i) が 5 名、ii) が 1.80 点であった。(b) 目標 2 の達成に有効なものとして、参加者が挙げた視点を Table 8 に示した。「これまで自分が築いてきたものを見つめ直し、逆に築けなかったものを新しく始めた点」が 3 名から挙げられ、評価平均 2.00 点であった。(c) 以上の視点からの目標 2 についての具体的な思索内容としては、人とのつながりの大切さに気付き、今後の人生で自分の周りの人を大切にしたいといった内容の記述が 3 名に見られた。これから自分がどう生きたいか、生きるべきかについての言及が 3 名の記述に見られた。自分にとっての幸福について思索している記述が 2 名に見られた。

Table 7 『最高の人生の見つけ方』課題 3 質問 1)
筆者が提示した視点に対する参加者の評価 (n=11)

	i) 人数	ii) 評価平均
A 「他人の人生に喜びをもたらす」、「見ず知らずの人に親切にする」、 家族との関係など、人とのつながりが描かれている点。	10	2.72
B 余命を宣告された後、2 人は旅に出るが、刹那的な楽しみに疑問を感じ、 最終的にそれぞれの家族のもとへ戻っていくという点。	7	1.54
C 家族のために生きてきたカーターと、キャリア中心に生きてきたエドワ ードが対照的に描かれている点。	5	1.80

Table 8 『最高の人生の見つけ方』課題 3 質問 2)
参加者から挙げられた視点

	人数	評価平均
これまで自分が築いてきたものを見つめ直し、逆に今まで築けなかったものに挑戦した点。	3	2.00

目標 3「自己の命の大切さ、今生きていることのありがたさを認識すること」を達成する視点及びその視点からの具体的な思索内容は以下の通りであった。(a) 目標 3 の達成に有効なものとして筆者が提示した視点についての、参加者の評価を Table 9 に示した。視点 A「カーターは家族にとって大切な存在であり、エドワードもまた、娘にとってたった 1 人の父親である。どんなことがあっても、2 人は家族にとってかけがえのない存在だという点」は i) が 10 名、ii) が 2.09 点であった。視点 B「主人公 2 人は人生でやり残したことを死ぬ前に実行していく。何かをしたり、楽しんだりできるのは、生きているからこそだという点」は i) が 8 名、ii) が 2.36 点であった。(b) 目標 3 の達成に有効なものとして、参加者が挙げた視点を Table 10 に示した。「自分 1 人で生きているのではなく、自分の命は自分 1 人のものではない、という点」が 3 名から挙げられ、評価平均は 2.00 点であった。(c) 以上の視点からの目標 3 についての具体的な思索内容としては、「自分が今生きているのは周囲の人のおかげだ」というような、周囲の人とのつながりの大切さを記述しているものが 4 名に見られた。そのうち 2 名は、周囲の人への感謝の気持ちを記述していた。当たり前だと思っている日常が、当たり前のことではなく、本当はありがたいことだと改めて気付いたという内容の記述が 3 名に見られた。

Table 9 『最高の人生の見つけ方』

課題 2 質問 1) 筆者が提示した視点に対する参加者の評価 (n=11)

	i) 人数	ii) 評価平均
A カーターは家族にとって大切な存在であり、エドワードもまた、娘にとってたった一人の父親である。どんなことがあっても、2人は家族にとってかけがえのない存在だという点。	10	2.09
B 主人公2人は人生でやり残したことを死ぬ前に実行していく。何かをしたり、楽しんだりできるのは、生きているからこそだという点。	8	2.36

Table 10 『最高の人生の見つけ方』課題 2 質問 2)

参加者から挙げられた視点

	人数	評価平均
自分の命は、自分一人のものではない、という点	3	2.00

考察

『死ぬまでにしたい10のこと』の教材としての映画の有用性の検討 目標1「自己の命の有限性、時間の貴重さを認識すること」を達成する視点と具体的な思索内容について検討する。『死ぬまでにしたい10のこと』では、筆者の挙げた視点 A「アンは 23 歳という若さにして、突然死を宣告されるという点」が目標 1 の達成に妥当な視点であると言える。また、参加者から挙げられた「アンが死の宣告を受けた後、死ぬまでにやりたいことを挙げて、書き出していた点」も、妥当な視点と考

えられる。この視点に関しては、挙げた人数が少なく、評価平均が高かった。これはこの視点の人がよっては有効性に気付きにくいものである一方、気付いた者にとっては、目標1に関してよく考えさせられる視点であることを示していると考えられる。また、具体的な思索内容から、命が有限であること、死がいつ訪れるかわからないということについて改めて気付かせる教材としてこの映画は有効であると考えられる。要因として、この映画の主人公が23歳の若者であることが考えられる。死に直面するのが若者であるという点で、「突然死に直面する」ことの意外性が際立っていたのではないだろうか。また、主人公と参加者が同年代であったため、参加者が主人公の境遇を自分自身と重ね合わせ易く、死が自分と無関係ではないことも認識しやすかったと考えられる。

目標2「これまでの生き方に対する反省と、今後の生き方についての思索がなされること」を達成する視点と具体的な思索内容について検討する。筆者が提示した視点では、視点B「アンが、死の宣告を受けた後に、残りの人生で何をするか考えた点。また、その時点で出来ることには限りがあったという点」が目標2の達成に妥当であった。視点A「アンは、死の宣告を受けた後、世間に『くだらないもの』が溢れていることに気付き、また、もっと大切なものに目を向けるようになったという点」も高くはないが妥当性を有するとみなせる。しかし、視点Aが、主人公の語りによって表現された、明確なものであったため、この視点に対する評価は、実際得られた評価よりも高いものを筆者は期待していた。さらに視点Aと類似した視点が、目標1,2を達成するものとして、参加者からも挙げられていた。このことから、この視点は視聴者によって、目標1,2のいずれも達成し得る視点なのではないかと考えられる。具体的な思索内容としては、自分がこの先どう生きるべきかについて考えさせることができると考えられる。また、日々の生活の中で当たり前になっていることに改めて目を向け、価値観の問い直しも促すことができた。この映画は、主人公が自分の病気のことを家族にも告げず、孤独な生き方を選んでいるのが特徴的であった。周囲の人との温かいつながりが描かれていないことから、人間関係を通しての目標の達成は難しいと筆者は予想していた。しかし、参加者が人との繋がりの中から自分の命の大切さを見出している記述も見られた。これは、主人公の生き方に「それでよいのか、それで本当に自分と周囲の人のためになるのか」と疑問を抱くことにより、自分だったらどうするかを振り返らせることができ、返って人間関係について考える機会を与えたものと考えられる。

目標3「自己の命の大切さ、今生きていることのありがたさを認識すること」を達成する視点と具体的な思索内容について検討する。目標3を達成するものとしては、筆者が提示した視点C「アンは人生でやり残したことを実行していく。何かをしたり、気持ちを伝えたり、色々な感情を感じたりできるのは、生きているからこそだという点」に高い妥当性が認められた。視点A「アンが『この先も家族と共に生きていきたい』という気持ちを抱いている点」、D「アンは、自分が死んだ後、子どもたちが自分を忘れてしまおうと語っている。しかし、アンの両親がどんな人物であってもアンにとって掛け替えのない存在であるように、子供たちやダンにとってもまた、アンの代わりとなる存在などいないという点」の2つの視点も妥当な視点と言える。しかし、これらの視点から参加者自身が目標2について「考えさせられた」と答えた人数は多いとは言えなかった。これについては、視点A, Dが映画中で明確に表現されたものではなかったことが要因として考えられる。

参加者によっては、読み取れた者と読み取れなかった者がいたのではないかと推測される。視点 B は目標 3 の達成に妥当な視点とはみなせなかった。このシーンはインパクトのあるものであったが、それにもかかわらず視点 B が筆者の予想に反して低評価であった理由としては、このシーンから参加者が読み取ったものが、筆者のそれと異なっていた、もしくは、筆者が予想したほどにはこのシーンに対する参加者の注意が大きくなかった可能性が考えられる。

以上より、この映画が 3 つの目標全てに関して考えさせる視点を有していることが確認された。このことから、この映画はデス・エデュケーションの教材として有用であると言える。また、この映画の主人公が本研究の参加者と同年代の若者であったことから、映画内で主人公に起こったことを、参加者が「もしも自分に起こったら」と考えながら視聴し、「死」を自分にも起こりうるものと考えていくことができていたことが確認された。

『最高の人生の見つけ方』のデス・エデュケーションの教材としての有用性の検討 目標 1 「自分の命の有限性、時間の貴重さを認識すること」を達成する視点と具体的な思索内容について検討する。筆者が提示した視点 A 「カーターとエドワードは、健康に暮らしていたが、急に余命を宣告されることになる。死はいつ訪れるかわからないという点」は目標 1 の達成に妥当な視点と言える。『死ぬまでにしたい 10 のこと』とは対照的に『最高の人生の見つけ方』は高齢者が主人公であるため、この視点に関してはあまり妥当性が確認されないのではないかと、筆者は予想していた。しかし、この結果から、『最高の人生の見つけ方』も目標 1 の達成に十分に有効であることが確認された。また、参加者から挙げられた「余命の宣告後に主人公達が残りの人生をどう生きたいかを考えた点」及び、「余命の宣告後に主人公達が改めて自分の人生を振り返り、生き方を変えた点」の 2 つの視点も目標 1 の達成に妥当な視点と見なすことができる。具体的な思索内容としては、この映画の主人公が老人であることから、命が有限であること、死がいつ訪れるかわからないということへの気付きは少ないのではないかと予想していた。しかし、『死ぬまでにしたい 10 のこと』と比べると傾向は弱いにしても、この映画でも自分の命の有限性について気付かせ、そしてそれを見据えてどう生きるべきか、ということについて考えさせることができるものと考えられる。

目標 2 「これまでの生き方に対する反省と、今後の生き方についての思索がなされること」を達成する視点と具体的な思索内容について検討する。筆者が提示した視点 A 「『他人の人生に喜びをもたらす』、『見ず知らずの人に親切にする』、家族との関係など、人とのつながりが描かれている点」は目標 2 の達成する視点として極めて妥当性が高いと言える。これは、映画が「人との繋がり」を大きなテーマとしていたことが要因であると考えられる。視点 B 「余命を宣告された後、2 人は旅に出るが、刹那的な楽しみに疑問を感じ、最終的にそれぞれの家族のもとへ戻っていくという点」、C 「家族のために生きてきたカーターと、キャリア中心に生きてきたエドワードが対照的に描かれている点」もまた、視点 A ほどではないが目標 2 の達成に妥当な視点と言える。また、参加者から挙げられた「これまで自分が築いてきたものを見つめ直し、逆に築けなかったものを新しく始めた点」も目標 2 の達成に妥当な視点と考えられる。具体的な思索内容として目立ったのは、自分を取り巻く人間関係を振り返るものであった。これは、この映画では人との繋がり大切さが大きなテーマとして描かれていたことによると考えられる。また、自分の幸福とは何かということや、この

先の人生をどのように生きるべきなのか、ということについても考えさせていることが確認された。

目標 3「自己の命の大切さ、今生きていることのありがたさを認識すること」を達成する視点と具体的な思索内容について検討する。目標 3 を達成するものとしては、筆者が提示した視点 A「カーターは家族にとって大切な存在であり、エドワードもまた、娘にとってたった 1 人の父親である。どんなことがあっても、2 人は家族にとってかけがえのない存在だという点」が妥当な視点と言える。この視点に高い妥当性が確認されたのは、「人とのつながり」がこの映画の最も大きなテーマであったことによると考えられる。視点 B「主人公 2 人は人生でやり残したことを死ぬ前に実行していく。何かをしたり、楽しんだりできるのは、生きているからこそだという点」もまた、目標 1 の達成に妥当な視点と言える。参加者から挙げられた視点「自分は 1 人で生きているのではなく、自分の命は自分 1 人のものではないという点」も目標 3 の達成に妥当と考えられる。ここでも目標 2 に関する具体的な思索内容と同様に、人間関係に関する記述が見られ、ここでは参加者が周囲との関係を大切にしようと考えているのが特徴的であった。このことから、人との繋がり大切に気づき、自分が今後の人生において周囲とどのように接していくべきか考えたことから、目標 3 の達成につながったと考えられる。また、参加者が周囲の人に対してだけでなく、自分の置かれている環境に感謝している記述も認められ、この映画は一見当たり前の日常を見直すきっかけを与えることができると考えられる。

以上より、この映画が 3 つの目標全てに関して考えさせる視点を有していることが確認された。したがって、この映画はデス・エデュケーションの教材として有用であると言える。この映画では、人間関係に関する記述が多く見られたことが特徴的であり、特に周囲の人への感謝の気持ちを述べているものが目立った。この映画では、周囲の人への感謝の気持ちから、自分の命や人生を振り返っている傾向が見られた。要因としては『最高の人生の見つけ方』が人と人とのつながりの大切さが大きなテーマとして描かれている映画であることが考えられる。

「余命の宣告後、死ぬまでにしておきたいことを考える」という視点 本研究で使用した 2 本の映画は、いずれも「主人公が余命の宣告を受けた後、死ぬまでにしておきたいことを考えている」という点が共通していた。このことに関して、『死ぬまでにしたい 10 のこと』では、「アンが死の宣告を受けた後、死ぬまでにやりたいことを挙げて書き出していた点」が、『最高の人生の見つけ方』でも「余命宣告後に主人公達が残りの人生をどう生きたいか考えた点」が、共に目標 1 の達成に有効な視点として、参加者から挙げられた。筆者はこれと類似した視点を、『死ぬまでにしたい 10 のこと』で、目標 2 を達成するものとして提示していたが、この視点は目標 2 よりも目標 1 を達成するものとして妥当な視点と考えられる。

本研究で扱った 2 本の映画では、主人公の年齢の違いが、この視点を参加者が主人公に自分を重ねて見るかどうかという点に大きく影響していた。主人公と自分を重ねて見ることにより、より「死」を自分にも起こることと考えることができたと考えられる。このことから、自分の命の有限性を自覚するという目標でデス・エデュケーションに映画を使用する際は、対象者と同年代の主人公の映画を扱うのがより効果的であると言える。しかし、『死ぬ前にしたい 10 のこと』がこの点でより有用性を示した背景には、単に主人公が若かったために、「死」のインパクトが大きかったことも要

因として考えられる。したがって、本研究よりも高い年齢の対象者の場合にも、同年代の主人公の方がよいかどうかという点に関しては検討の余地がある。

まとめと今後の課題 本調査では、デス・エデュケーションに適した教材を作成することを最終目標とし、筆者が選出した2本の映画『死ぬまでにしたい10のこと』、『最高の人生の見つけ方』が、筆者が設定したデス・エデュケーションの3つの目標に適したものであるかどうかを、大学生を対象にこれらの映画を視聴させ、その後、3つの目標の達成に有効な視点を調べるための課題に回答させることにより検討した。その結果、いずれの映画も3つの目標全てにおいて達成に有効な視点をもつことが確認でき、これらの映画がデス・エデュケーションの教材として有用であることが確認された。

また、それぞれの映画の特徴から、映画間での参加者に与える影響の違いも見られた。本研究で用いた2本の映画は、主人公の年齢と、「人との繋がり」の描かれ方の2点において大きく異なっていた。年齢に関しては、高齢者を主人公とする『最高の人生の見つけ方』よりも、主人公が23歳と若い『死ぬまでにしたい10のこと』の方が、主人公が直面した「死」を自分に引き付けて考えることができ、この映画は自分の命の有限性に気付かせる際に有効と考えられる。しかし、主人公が高齢者の『死ぬまでにしたい10のこと』でも、この点においてある程度の有効性が確認された。このことから、主人公が自己の死に直面するという設定が、参加者が自己の命の有限性に気付くきっかけを与えるものであると考えられる。

「人とのつながり」の描かれ方に関しては、人間関係をより温かく描いていた『最高の人生の見つけ方』において、周囲の人に感謝がより多く表現され、人間関係について考えることが目標達成のきっかけとなっていた。一方、『死ぬまでにしたい10のこと』では主人公の孤独が描かれていたが、こちらでも人間関係を振り返る記述は見られた。これに関しては、主人公の孤独な生き方に疑問を投げかける形であった。このことから、同じ「死」を主題としたものであっても、それぞれの映画で描かれている内容によって、視聴者がどのような側面から「死」と「生」について考えるかが異なると考えられる。

引用文献

- 秋山 智・加藤匡宏 (2003). 生涯教育の視点から「デス・エデュケーション」の実践的研究～愛媛大学共通教育の授業展開より～ 愛媛大学教育実践総合センター紀要, 21, 175-189.
- デーケン (1986). 死への準備教育 第1巻 死を教える メヂカルフレンド社
- 海老根理恵 (2008). 死生観に関する研究の概観と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 48, 193-202.
- 藤腹明子 (1986). 教材としての映画・テレビ——看護教育の体験をふまえて アルフォンス・デーケン (編) 死への準備教育 第1巻 死を教える メヂカルフレンド社, pp.270-283.
- 林 智一・上野徳美 (2009). 医療・臨床心理学教育における映画教材活用の試み : 映画を用いた授業実践とその教育効果の実証的検討 大分大学高等教育開発センター紀要, 1, 1-11.

Kübler-Ross (1974). *Death: The Final Stage of Growth*.

- (エリザベス・キューブラー＝ロス 鈴木昌 (訳) (2001). 死, それは成長の最終段階 中公文庫)
- 大津多賀 (2005). 中学校におけるデス・エデュケーションの意義と実践 龍谷大学大学院文学研究科紀要 27, 238-242.
- 佐伯洋子・高内正子 (2008). 「いのちの教育」に関する研究 : 大学生をとおして 大阪観光大学紀要, 8, 59-68.
- 丹下智香子 (1995). 死生観の展開 名古屋大学教育學部紀要, 42, 149-156.